

Title	新著紹介: 竹内治彦編著 『グローバリゼーションの社会学』八千代出版、1997年3月
Sub Title	
Author	竹内, 治彦(Takeuchi, Haruhiko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1997
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.2 (1997. ) ,p.89- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新著紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19970000-0089">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19970000-0089</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

新著紹介：竹内治彦編著

『グローバリゼーションの社会学』 八千代出版、1997年3月

竹内 治彦

---

この教科書の編集方針というのは、社会学を学ぶことを所与にしないということでした。別の言葉で言うと、受け手の側は何も社会学体系を「学ばねばならない」状況にはないということです。社会学を学ばねばならない人に、体系的に社会学を学んでもらうのなら別の方針があったと思います。しかし、例えば、私が勤めているような経営学部の、いわゆる（旧）教養課程の中で、いくつかある科目の中で社会学を取ろうか迷っている学生にも興味を持てるものにする、しかも期間は1年間、オフィシャルには年間30回、現実にはそれよりも幾分少ない講義日数の中で説明するとなると学問の体系的な説明はほとんどできなくなります。こうした場合に、その学問の本質的な考え方についての講義を繰り返す方法と、応用的な側面に特化し現実分析を通じてその学問の特徴を感じ取らせる方法があるかと思います。この本は、この後者の方法を選択したものだと言うことができます。したがって、社会学理論の解説にはあまり紙幅を割かず、今日の問題について社会学の視点から解説する、つまり社会学によって現実を説明することに主眼をおいています。

社会の現実といっても、取り上げるべき事象は人によって様々なのであり、共通の視点を定める必要が生じます。そこで共通テーマとして、グローバリゼーションを選び、それと関連させつつ開発や外国人労働者、情報化、災害、環境、マイノリティー等の多様なテーマに関して論じてもらいました。主観についての再帰的な考察（反省）を土台とした社会学研究が主流になっている感があるなかで、いささか古風なマクロ的視点を重視してみました。とくに行政関係の仕事や、実践運動に携わったことのある執筆者に書いてもらった章には編者の非力をカバーする力強さがあるのでは期待しています。また、データを重視しようということで、各章で3～4頁ずつの図表や資料の頁を入れ、なるべく最新のデータについて解説してもらいました。他方で、社会学としての足を固めるために、階層や学歴、家族、人口といったテーマについては重点的に取り上げています。

社会学的な解説を試みると言っても、執筆者達に共通の社会学的（研究）手法が確実にあったわけではないし、取り上げているテーマも上述のように広い範囲に渡っています。それでも全体を読み進めるなかで、たしかに人間は社会を形成しながら生きており、そして、その社会に規定されても生きていくという、人間存在の社会性が具体的な論述の背後に見えてくればというものが、意図したところでした。そのため、この本では社会形成といった表現を用いています。例えば、欧米の社会的勢力とよばれるような組織（労働組合、市民団体）の目標とする社会制度の充実と、日常的な社会生活の蓄積とに共通させて「社会」を構築することを考え、そうした問題認識を社会形成と表現しているものです。欧語

では二つの異なる「社会」ですが、社会的公正基準といった時の社会と、社会生活を充実させるといった時の社会とに、共通して社会という問題領域があるのだと考え、それが経済や法と対比される、個別専門学科としての社会学の対象であると論じています。

(本体価格、2,400円)

(たけうち はるひこ 岐阜経済大学経営学部)